

## エッグショック 上

卵がない  
ブラジル産頼ったが

イフジ産業の藤井宗徳社長



卵加工大手のイフジ産業（福岡県）は今春、海外からの鶏卵の輸入を強化した。

国内の養鶏農家から年に約12億個の鶏卵を仕入れ、あらかじめ卵の殻を割った「液卵」にしてパンや菓子などの食品会社に出售している。今年、その原料である鶏卵が足りなくなつた。

高病原性鳥インフルエンザが世界で猛威を振るい、国内でも昨年10月から今年4月にかけて26道県で発生した。農林水産省は感染の疑いがある養鶏場の全ての鶏を殺処分した。その数は過去最多の1771万羽。全体の約1割にあたり、このうち9割が採卵鶏だった。

卵の流通量は減り、農林水産省は1月、深刻な卵不足からスーパーなどの家庭向けに優先的に流通させるよう要請した。そのあまりで、大量に消費する業務用は足りなくなつた。各社は鶏卵の確保に奔走した。「世界中で卵の争奪戦が起きた。『エッグショック』です」

イフジ産業は、来春までブラジルからの輸入を続けると、年間取扱量の1割弱を占めることになる。それも、いつまで輸入できるかはわからない。

南米でも鳥インフルの感染が広がるなかで、鶏卵の生産量が豊富なブラジルは発生を免れていた。そのため、世界中から注文が相次いでいるという。

イフジ産業は、来春までブラジルでも異変があった。野鳥が鳥インフルに感染したことが確認されたのだ。

野村哲郎農水相は6月6日の記者会見で、「鶏に伝染すると、これは厄介なことだ。輸入できなくなると、加工用の卵の不足も考えられる」と危機感を強めた。

今春以降、感染が収まつた国内でも、生産量の回復は途上だ。

農水省によると、6月13日時点で、処分された採卵鶏の17%にあたる283万羽が再び養鶏場に入つてきているという。

ただ、鳥インフルの発生後、鶏の孵化から市場に出せる卵を産むまでには早くとも半年ほどかかる。養鶏場が感染前の状態に戻るには、さらに1年かかるとされる。野村農水相は「待つ以外ない」と話す。

小売店や飲食店では少しづつ落ち着きを取り戻している。スーパーでの品切れは解消しつつあり、大手の飲食店も手探りで卵メニューを開ける動きも出てきた。そのなかで、国や自治体、養鶏農家は今秋にも想定される次の流行に備え始めている。

（池田良、加藤裕則）

◆2回連載します。